

古岩井さんへの惜別の辞

伊 藤 克 敏

出会いと別れは人生の常ではあるが、個人的に大変親しくして頂いた古岩井さんが定年退職まで数年を残して去られることは誠に残念である。「あら、お元気？」と満面に笑みを浮かべて挨拶され、別れ際には「ご機嫌よう」と言われたあの姿が見えなくなるとは淋しい限りである。

古岩井さんは国際基督教大学（ICU）出身だけあって英語は堪能で、海外の学会で研究発表したり、海外研修に出かけたりで、活発な学会活動を展開して来られた。また、国内研修では東大で英語学の重鎮である池上嘉彦教授の下で意欲的に研究された。研究成果を諸学会誌や本学の人文学会や言語研究センターの紀要などに発表しておられる。そして、今までのご研究の成果の一端を『物語とことばのインターフェイス』（今日の話題社）にまとめられた。本書の冒頭で、語学学習の実用主義偏重を鋭く批判し、「人間性回復のために、ことばの感性を涵養することが必須である」とし「人間性涵養」のために、文学作品の講読鑑賞も重要である、としている。そして、「文

学作品研究と言語研究という二つの学問分野の基底にあるものを認識し、言葉が人間の意思の伝達としての道具的な役割を遥かに越えて、人間の感性を養い、人間性の真実を実現させるものだ」と気がつくことが必要である。」との語学教育論を展開しておられる。古岩井さんは言語学と文学の境界を成す文体論研究を文学作品、民話、童話などの分析を中心に展開しておられる。R・ヤコブソンやB・コムリなどの理論を援用した精緻な実証的研究は談話・テキスト研究で高く評価されるであろう。

言語研究センターでの「物語における視点」についての研究発表で当時認知意味論研究で視点を重視しておられた国広哲弥氏との間で交わされた議論が強く印象に残っている。古岩井さんの研究は文体論に留まらず、比喩、笑いなど比較言語文化論などにも造詣が深く、更なる研究成果を期待したい。人生をエンジョイしながら、実り豊かな日々をお送り頂きたい。ご健勝を心より祈念しつつ。